

幕末に果たした薩摩の役割 ―薩摩島津斉彬による革命― 世界遺産にどうして認められたか

顎顔面放射線学分野 馬 嶋 秀 行

2001年8月に放射線医学総合研究所から鹿児島大学へ赴任し、早いもので18年の歳月が流れた。私は東京生まれ、東京育ちであるが、鹿児島は第二の故郷だと思っている。鹿児島には桜島、黒豚、サツマイモ、お茶、焼酎、温泉などといった誇るべきものがたくさんある。なかでも焼酎にはとても魅せられ、いろいろと勉強もした。このことが高じて、国際宇宙ステーション“きぼう”に焼酎の麹菌3種と酵母3種を打ち上げ、地上に戻ってきた麹菌・酵母を使い宇宙焼酎まで作ってしまった。このことは、鹿児島大学医師会報にも書かせていただいた（馬嶋秀行、鮫島吉廣：宇宙焼酎醸造にかけるロマン、医学部医師会報 第31号，52-54，2011.）

鹿児島は歴史的にもとても興味深く、明治維新の中心人物がここ鹿児島から多く輩出している。「明治維新」は、西欧列強から植民地化されないように、日本を生まれ変わらせようという動きから始まっている。幕府・薩摩・長州など、それぞれがその実現に向かって動き、意見・方針が対立した。そして最後の最後に、薩摩・長州が幕府を見限って、倒幕に踏み切り、明治維新を断行した。「明治維新」は新たな近代国家を築き上げる激動の時代であり、2018年はちょうど明治維新150周年の年であった。それでは、なぜ日本は“明治”に向かうことができたのであろうか。

時代を遡ること、1603年徳川家康が全国を統治し江戸幕府を開いた。その後徳川慶喜の大政奉還（1868年）まで、約260年間江戸時代が続いた。日本は鎖国体制を敷いていた。鎖国体制はキリスト教禁止令から始まり、1624年のスペイン船来航禁止、1639年のポルトガル船の入港禁止を持って開始された。江戸幕府スペインとポルトガルを排除した理由の一つは、両国がキリスト教の布教をしながら領土拡大し勢力を伸ばそうとしていたからである。つまり江戸幕府の統治を脅かしかねない海外からの脅威を排除しようとしたのである。

日本へ最初にキリスト教を伝えたのはフランシスコ・ザビエル（1506年4月7日-1552年12月3日、スペインのナバラ王国生まれのカトリック教会の司祭、宣教師。イエズス会の創設メンバーの1人。バスク人。）である。彼は1549年、8月15日に鹿児島・祇園之洲に上陸後、2年間日本に滞在し、キリスト教布教活動を行うも「日本より、まず先に中国で広めるべき」と考え、1551年11月15日、トーレス神父とフェルナデス修道士らを残し、かわりに日本人青年4人（鹿児島のベルナルド、マテオ、ジュアン、アントニオ）を同行させ出帆、種子島、中国の上川島を経てインドのゴアを目指した。その後中国に渡り、そこで亡くなっている。幕末に滞日したオランダ人医師ボンペ（1857-1862）はボンペ日本滞在看聞記（1867-1868）の中で、「彼ら日本人は予の魂の歓びなり」と言ったザビエルの言葉が、ペリー率いるアメリカ艦隊の日本遠征を決心させる原因となった。その結果として、真に広く世界貿易と国際間の交流とに日本の門戸を開放させることとなった。」と述べている¹。ザビエルはナバラ王国出身であるが、ポルトガルのリスボンに大航海時代を記念した記念碑「発見のモニュメント」の中にザビ



図1

エルの像を観ることができる（図1）。日本は、1858年には通商条約を締結し、諸外国と貿易を始めている。

その数十年後、日本では秀吉が突如キリスト教に対して態度を硬化させる事件が起こった。文禄5（1596）年、土佐にスペイン船サン＝フェリペ号が漂着し、この船の水先案内人の言葉、特に「スペイン国王がキリスト教布教により他国を征服していく」という話が秀吉を激怒させたとされている²。その後、キリシタンへの迫害が始まり、秀吉は主にキリスト教宣教師に国外退去を命じた。禁教令を出し、京都にいたフランシスコ会などの教徒を捕らえ、長崎に連行してはりつけにした。この中には日本人も入っており、後にローマ法王によって日本二十六聖人³に列せられている。禁教令を受け継いだ江戸幕府は、慶長17（1612）年の禁教令でさらに弾圧を強化した。そして、開国直後の慶応元（1865）年、長崎の大浦天主堂のプティジャン神父を訪ねてきた人々が、自分たちは信者だと告白した。彼らこそ、迫害を耐え抜き代々信仰を守り続けてきた潜伏キリシタンだった。これが長崎の信徒発見（隠れキリシタンの発見）であり、250年を経た2018年6月30日には、第42回世界遺産委員会において「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」⁴に登録された。

さて、ポルトガル人はキリスト教の弾圧により国外退去になるが、果たしてポルトガル人はキリスト教布教だけを目的としていたのであろうか？

図2に示すように、1575年オランダのメルカトルにより発刊された東洋地図⁵では、日本はさつまいもの



図2 1575、メルカトル、アジア図



図3 1595、テイシェイラ、オルテリウス、メルカトル、日本図

ような形をした島として描かれており、その中で鹿児島はCangoxinaと記載されている。このCangoxinaは大河ドラマ西郷どんにおいて、島津斉彬が持っていた包み紙に描かれていた文字ということで紹介され、これはポルトガルの地図に基づいている。このことは、当時世界が日本の存在をすでに知っていたという証拠である。図3に同じく1595年に刊行されたテイシェイラによって描かれた日本地図⁶を示す。図4にはこの図の九州地方を拡大して示した。図中、Cangaxu:ma（鹿児島）、Saceuma（薩摩）、Osumi（大隅）、Nangalyxuma（長島）の名前が見てとれる⁷。これらの図は、図1と比べるとまるで別物で、より詳細に描かれている。キリスト教布教のため訪れたポルトガル人が航海・貿易で日本のことを知る必要であり日本を調査していた。その情報がイエズス会士の情報網を通じてテイシェイラ（1564–1604）に伝えられ、オランダのオルテリウス（1527–1598）によって発刊にいたったようである。テイシェイラはイエズス会士の地図製作者でスペイン王室に仕えていた。しかしながら、前述のように、秀吉がキリシタンの排斥を行い、ポルトガル人



図4 1595、テイシェイラ、オルテリウス、メルカトル、日本図

は日本を去ることに余儀なくされる、秀吉はやはり先見の明があったのであろう。

ポルトガル、スペインは排除されたにも関わらず、我が国の中でオランダがヨーロッパ諸国の中で唯一交易が認められたのはなぜだろうか？その答えは、オランダはキリスト教布教をしなかったからである。オランダとの窓口である出島には、オランダ人が住み、約200年に渡り交易を行った。オランダ人はポルトガル人のようなキリスト教布教という失敗を繰り返さなかった。これは、元々のオランダ人気質とも関係しよう。

オランダといえばシーボルト事件⁸がある。

文政11年（1828年）9月、オランダ商館付の医師であるシーボルト⁹が帰国する直前、所持品の中に国外に持ち出すことが禁じられていた日本地図などが見つかり、それを贈った幕府天文方・書物奉行の高橋景保ほか十数名が処分され、高橋景保は獄死した（その後死罪判決を受け、景保の子供らも遠島となった）。これは江戸で幕府天文方高橋景保が禁制品であった伊能図をシーボルトに見せ、その写しをシーボルトに渡したことが発端である。シーボルトは文政12年（1829年）に国外追放の上、再渡航禁止の処分を受けた。その後、シーボルトは安政5年（1858年）の日蘭修好通商条約の締結により追放が解除となり、翌安政6年（1859年）に長男アレクサンダーを伴って再来日し、幕府の外交顧問となっている。日本シーボルト協会¹⁰は、よくシーボルトとその子孫について記述している。シーボルトは楠本滝と結婚しているが、次男のハインリッヒ（小シーボルト）^{9,10}も日本人と結婚している。

伊能図は上総国出身で商人だった伊能忠敬（1745年-1818年）が1800年から1816年にかけて江戸幕府の事業として測量・作成が行われ大日本沿海輿地全図を完成させた¹¹。日本を強制退去となったシーボルトは帰国後の1840年に、伊能図をオランダでメルカトル図法に修正した「日本人の原図および天文観測に基づいての日本国図」を刊行している。その精度の高さにより、当時のヨーロッパ識者の一部に日本の測量技術の高さが認識されることになる。シーボルトは高野長英から、医師以外の肩書は何か、と問われて、「コンテンス・ボンテール・ラルテ」とラテン語で答えたと渡辺崋山が書いているが、これは「コレスポンデントヴェルデ」であり、内情探索官と訳すべきものである⁸。それにしても伊能忠敬の当時の地図を作成する能力、技

術、それに費やした時間と労力には脱帽するばかりである。

昔の日本史の教科書には、日本は鎖国体制を敷いていたが、唯一「出島」では外国との貿易を行っていたと記載されていたが、出島以外に薩摩が奄美と琉球の支配をしていたという事実は驚くべきことである。これは、元々は幕府の命令により行われ、これにより薩摩は主に中国との交易を行うことになる。

加賀100万石という言葉はよく聞くと、加賀藩の江戸屋敷のあったところは、今の東京大学の敷地である。それでは加賀藩の次に栄えていた藩はどこの藩であったのか？それは77万石といわれる薩摩藩である。

薩摩は77万石であったといわれているが、実は当時の薩摩の石高は40万石くらいであった。石高とはその土地における生産性であり、また、この石高から公儀への諸役負担を確定させることを目的としていた。この遠い道のりの参勤交代も重い負担であったはずである。では、どうして77万石を支払えたのであろうか。これこそ、薩摩の奄美、琉球支配である。初代薩摩藩主島津家久（1601-1638）は、1609年、奄美・琉球に侵攻し勝利した¹²。1610年、尚寧王（1564-1620）は、薩摩藩主島津家久と共に江戸へ向かい、途上の駿府にて徳川家康に、そして8月28日江戸城にて將軍徳川秀忠に謁見した。これにより薩摩は琉球の支配権が認められ、また割譲した奄美群島を直轄地とした。これにより以前からある明との貿易を拡大することができた。この貿易は、幕府が許したことであったが、その貿易量はとても大きなものになり、江戸幕府は憂慮せざるを得なくなった。NHKドラマ「篤姫」には感動を覚える場面が随所にあったが、なぜ、薩摩の姫が徳川家と婚姻することになったのであろうか？それは、11代將軍家斉の夫人が島津重豪の娘であり、家斉は長命で50人を超す子宝に恵まれた。13代家定は病弱で子ができなかった。それでおじいさんみたいに島津家から夫人を迎えれば、長生きして子だからに恵まれると、將軍家側から島津家に婚姻を申し込んだのだ。一方、薩摩は貿易を通して、その当時世界でどのようなことがおこっているのかを知るようになる。

この時代における世界状況は、ヨーロッパの西洋列強が、アフリカ、アジアを植民地化することに奔走していた。アジア30カ国で植民地にならなかったのはわずか2カ国であり、それはタイ¹³と日本である。1800

年代の末頃には、西及び南からイギリスがタイをねらう一方で、フランスは東からタイをねらっていたが、両国が衝突を避けたため、タイは植民地化を免れた。一方、日本は当時富国強兵を掲げ、西洋に飲み込まれないようにしていた。どうして欧州の国々が他の地域に進出できたのか？その背景には、ヨーロッパにおける近代文化の発展が大きく関係している。大航海時代、とりわけ16世紀から18世紀の時期に、主にヨーロッパ諸国はアフリカ、アメリカ大陸、アジアへの大規模な航海が行われ、17世紀以降には大西洋奴隷貿易が本格化し、19世紀末には植民地化が進んでいった。約3世紀にわたりアフリカ原住民を対象として、植民地化は展開され、西インドのプランテーション経営に必要な労働力となった¹⁴。この背景には、ヨーロッパにおける近代の文化の発展が関係する。

日本に対するヨーロッパにおける近代の文化の影響は、1543年ポルトガル人をのせた中国の船舶が種子島に到着し、鉄砲伝来したことが最初となる¹⁵。この時代にすでに西洋諸国は鉄砲を使用し鉄を用いた文化を発展していたということを意味しよう。しかし、驚くべきことは、戦国時代（1493年－1590年）末期には日本は50万丁以上を所持していたともいわれ、当時世界最大の銃保有国となっていたことである¹⁶。その後、ヨーロッパにおける鉄の文化発展は益々加速することとなる。最初の自動車は蒸気機関で動く蒸気自動車で、1769年にフランス陸軍の技術大尉ニコラ＝ジョゼフ・キュニョーが製作したキュニョーの砲車であると言われている¹⁷。世界最初の実用的な蒸気船は、1783年にフランス人であるクロード・フランソワ・ドロテ・ジュフロワ・ダバン（Claude-Francois-Dorothee, marquis de Jouffroy d'Abbans）によって作られた¹⁸。そして、1802年、リチャード・トレビシックがマーサー・ティドヴィルのペナダレン製鉄所で高圧蒸気機関を台車に載せたものを作った。これが世界初の蒸気機関車とされている¹⁹。そのころの日本は、前述のように、江戸の文化真っ盛りである。

薩摩は生麦事件（1862年9月14日）を発端とし、All Japanではなく英国と戦争する。いわゆる薩英戦争（1863年8月15日－17日）²⁰である。薩摩側の砲台によるイギリス艦隊の損害は、大破1隻・中破2隻の他、死傷者は63人（旗艦ユーライアラスの艦長や副長の戦死を含む死者13人、負傷者50人内7人死亡）に及んだ。一方、薩摩側の人的損害は、諸説あるが以下のように言われている。祇園之洲砲台では税所清太郎

（篤風）のみが戦死し、同砲台の諸砲台総物主（部隊長）の川上龍衛や他に守備兵6名が負傷した。他の砲台では沖小島砲台で2名の砲手などが負傷した。市街地では7月2日に流れ弾に当たった守備兵が3人死亡、5人が負傷した。7月3日も流れ弾に当たった守備兵1名が死亡した。また、物的損害は台場の大砲8門、火薬庫の他に、鹿児島城内の櫓、門等損壊、集成館、鑄銭局、寺社、民家350余戸、藩士屋敷160余戸、藩汽船3隻、琉球船3隻、赤江船2隻が焼失と軍事的な施設以外への被害は甚大であり、艦砲射撃による火災の焼失規模は城下市街地の「10分の1」になったと言われている。朝廷は島津家の攘夷実行を称えて褒賞を下した。

当時、世界最強を謳われたイギリス海軍が事実上勝利をあきらめ横浜に敗退した結果となったのは驚きであり、当時のニューヨーク・タイムズ紙（図5：1863年10月4日発刊）は「この戦争によって西洋人が学ぶべきことは、日本を侮るべきではないということだ。彼らは勇敢であり西欧式の武器や戦術にも予想外に長けていて、降伏させるのは難しい。英国は増援を送ったにもかかわらず、日本軍の勇猛さをくじくことはできなかった」と評している²¹。さらに、1863年11月15日発刊のニューヨーク・タイムズ紙には、The Anglo-Japanese War と称して、この戦争の英国軍の戦いの結果の悲惨さと、これを通じ西洋と日本の文化の差を詳細に表している²²。島津家は2万5000ポンドに相当する6万300両を幕府から借用して支払ったが、薩摩は



New-York Times, Sunday, October 4, 1863.

October 4, 1863, Page 4
The New York Times Archives

図5

これを幕府に返さなかった。また、講和条件の一つである生麦事件の加害者は「逃亡中」として処罰されなかった。薩摩と英国の物語はまだ続く。明治になり、明治3年(1870年)、英国人医師ウィリアム・ウィリス(1837年－1894年)が鹿児島医学校兼病院(鹿児島大学医学部前身)の創始者となった²³。そして、これを基盤として鹿児島大学歯学部が生まれることになる。

薩英戦争が終わり、英国をはじめ欧州、米国の国力、文明の高さを見せつけられた薩摩はこれではまだまだ追いつけないと思ったのであろう。薩摩は若き薩摩藩士を密行によりイギリスに行かせることにした。この手助けをしたのはグラバー氏であった。選抜された学生たちは五代ら引率者とともに、元治2年(慶応1年、1865年)1月18日に鹿児島城下を出発。薩摩郡串木野郷羽島村(現在の鹿児島県いちき串木野市羽島)の港から船の都合により2カ月ほどの待機を経た後3月22日、トーマス・グラバーの持ち船であるオースタライエン号で密航出国した。このメンバーは後の明治時代に活躍する錚々たる顔ぶれであった。イギリス到着後、一行19名のうち、引率係の新納久脩、寺島宗則、五代友厚と、通訳の関研蔵、年少の長沢鼎を除いた14名が、3カ月の語学研修ののち、ロンドン大学のユニバーシティカレッジの法文学部聴講生として入学し、先に入学していた長州藩の留学生2名(井上勝と南貞助)とともに学んだ。これは、西郷どんのNHKドラマにも登場し、このことが薩長同盟のきっかけとなった^{24, 25}。これらは幕末から明治維新にかけての激動のなか、薩摩藩と長州藩が重要な役割を果たしていった一つの軌跡である。

2015年、「明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼、造船、石炭産業」がユネスコから世界文化遺産に認定された²⁵。鹿児島を含む全国8県11市にまたぐ日本の世界遺産の一つである。残念ながら、鹿児島でもそのことを知っている人は意外と少ない。この功績を世界遺産に訴えた人こそ島津忠裕氏(島津氏第33代、島津興行の現社長)であった。

前述のように、アジアに西洋諸国の植民地化が進むなかで、1851年薩摩藩主となった島津斉彬は、日本はこのままでは滅びてしまう危機感を抱き、それを食い止め、さらに西洋に追いつけ追い越せと大砲、武器、弾薬作りをはじめ、ガラス工芸、洋式帆船製造など製

鉄、造船などの産業や軍事力に強化に力を注いだ。ユネスコがこの世界遺産「明治日本の産業革命遺産」に認定したのは、西洋の鉄を主流とする近代文化が、初めて西洋以外の地に根付いたことを意味しており²⁶ 鎖国時代から明治維新にかけて、技術的、経済的に飛躍していった日本において薩摩の貢献がいかに大きなものであることは言うまでもない。特に薩英戦争では、薩摩があつた英国に負けなかったという結果を生み出した。これで、アジアの他の国のように植民地にはなかなかできない印象を世界中に植え付けることができたことは、薩摩・鹿児島の大きな誇りであると思う。

鹿児島大学歯学部では、昭和56(1983)年から毎年、歯学部紀要を発刊し、歯学部における様々な活動を紹介、広報してきた(<http://w3.hal.kagoshima-u.ac.jp/35-organization/352-annals.html>)。以前には、歯学部紀要に以下の我々の宇宙実験のことを書かせていただいた。

馬嶋秀行：国際宇宙ステーションにおけるヒト神経細胞宇宙実験「Neuro Rad」―ヒト長期宇宙滞在 神経細胞に何がおこるか? 鹿児島大学歯学部紀要、30巻：23-31, 2010.

この歯学部紀要も今年度で終了し、発展的解消として次の南九州歯学会誌にバトンを渡し、地域の歯科の発展を目指し取り組んでいく。これも、鹿児島大学歯学部の維新とも言えよう。

謝辞

本稿は、歴史的な真実を重んじ、島津氏第33代島津忠裕島津興業社長のお許しをいただき、尚古集成館の学芸員の方の推敲をしていただきました。ここに島津氏第33代島津忠裕島津興業社長と尚古集成館の学芸員の方に御礼申し上げます。

文献

- ¹ ボンベ日本滞在看聞記, 新異国叢書, 第10巻, 雄松堂出版, 沼田次郎・荒瀬進訳, 1968, 緒言 p4.
- ² <https://rekijin.com/?p=15957>
- ³ <https://ja.wikipedia.org/wiki/日本二十六聖人>
- ⁴ <https://ja.wikipedia.org/wiki/長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産>
- ⁵ <https://kutsukake.nichibun.ac.jp/obunsiryo/map/1595-2/>
- ⁶ <https://kutsukake.nichibun.ac.jp/obunsiryo/map/1595-1/>
- ⁷ <http://www.orteliusmaps.com/topnames/ort165.html>
- ⁸ <https://ja.wikipedia.org/wiki/シーボルト事件>

- https://ja.wikipedia.org/wiki/ フィリップ・フランツ・
フォン・シーボルト
- ¹⁰ <http://siebold.co.jp/kyoukai/aboutsiebold>
- ¹¹ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 大日本沿海輿地全図](https://ja.wikipedia.org/wiki/大日本沿海輿地全図)
(完成は1821年)
- ¹² 奄美，琉球の薩摩による支配 [https://ja.wikipedia.org/
wiki/ 琉球侵攻](https://ja.wikipedia.org/wiki/琉球侵攻)
- ¹³ <http://myasia.world.coocan.jp/Thailand.html>
- ¹⁴ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 奴隷貿易](https://ja.wikipedia.org/wiki/奴隷貿易)
- ¹⁵ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 鉄砲](https://ja.wikipedia.org/wiki/鉄砲)
- ¹⁶ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 火縄銃](https://ja.wikipedia.org/wiki/火縄銃)
- ¹⁷ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 自動車](https://ja.wikipedia.org/wiki/自動車)
- ¹⁸ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 蒸気船](https://ja.wikipedia.org/wiki/蒸気船)
- ¹⁹ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 蒸気機関車](https://ja.wikipedia.org/wiki/蒸気機関車)
- ²⁰ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 薩英戦争](https://ja.wikipedia.org/wiki/薩英戦争)
- ²¹ [https://www.nytimes.com/1863/10/04/archives/the-
progress-of-the-japanese-war.html](https://www.nytimes.com/1863/10/04/archives/the-progress-of-the-japanese-war.html)
- ²² [https://www.nytimes.com/1863/11/15/archives/the-
anglojapanese-war.html](https://www.nytimes.com/1863/11/15/archives/the-anglojapanese-war.html)
- ²³ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ ウィリアム・ウィリス](https://ja.wikipedia.org/wiki/ウィリアム・ウィリス)
- ²⁴ [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 薩摩藩第一次英国留学生](https://ja.wikipedia.org/wiki/薩摩藩第一次英国留学生)
- ²⁵ <http://www.ssmuseum.jp/info.html>
- ²⁶ <https://whc.unesco.org/en/list/1484>